

漢法苞徳塾資料	No. 089
区分	医学史（15期入門講座）
タイトル	古典についてⅡ（傷寒論と温病学）
著者	八木素萌
作成日	1995.12.03

◎11月には、「古典について(I)」の中で『黄帝内経と難経』について考えてみました。著作された年代や研究者や主要な研究書などについては、既に多くの紹介があるので、それらについては、そちらで研究していただきたいと思います。そう願っておきまして、「難経の達成」を「内経」の記述との関連で考えてみる、と言う方法で、私の考えを述べました。

そこでは

「内経」→「難経」→「歴代の鍼灸書」と言う〈Aの流れ〉と、
「内経」→「傷寒論」→「各種の湯液系医学書」と言う〈Bの流れ〉が、

大雑把に言えることについても触れました。

そして、「難経」の言う処と「内経」の説とに食違があることを問題にして、「難経」には問題があるとか、あまり従えないものであるとか、要するに賛成出来ないと言うかなり強い見解があります。しかし、これは医学史上の、ことに学説史上の両書の位置関係から論じなければならない問題であるのに、この位置関係の側面はあまり検討しないままであるのに、「難経」に否定的な態度を見せている面を強く感じます。歴史的・学説的に、評価して行く態度の大切な事を言わなければならないように思われます。そうでないと、時代が下るにつれて、誤ってゆく（＝原典から離れて行く）ことになる。古代の原典こそ不可侵なもの、とばかりの思想になります。こう言う思想をこそ問題にしなければならぬ点も論じました。また、「難経」の影響は、鍼灸の専門書であるにもかかわらず、後代の医学全般にその影響を色濃く残している点も指摘して置きました。

◎今回は「古典について(Ⅱ)」として「傷寒論」と「温病学」の問題について考えてみようと思います。言うまでもなく、漢法医学史においては、湯液を用いる診療が主なものになってからは、どうしても、鍼灸による診療は副次的な位置におかれて行ったと言えるようです。その為に、医学理論の発展を追跡しながら、その経過と内容を研究しようとする場合には、湯液・鍼灸の分野の別なく、研究する事が大切になります。

『黄帝内経・素問』の「熱論第31」の記述と、『傷寒論』の「卷二・傷寒例第三」の記述を比較対照して検討すれば誰にも明瞭な事ですが、『素問』の三陰三陽の記述に「脈状」記述を加え、症候記述に若干の追加を行なっています。ですから『傷寒論』は『素問』の「三陰三陽論」の基礎の上に展開されたものであると言うことが分かります。

『難経』「五十八難」の「傷寒」に関する記述は、『素問』の「熱病は傷寒の類」と言う立場を継続

して「広義の傷寒」を記述しています。そして、様々な傷寒の症状に対応した基本的な「病名」と、それぞれの脈状と治療原理についての論を展開しています。

両者ともに『素問』の基礎のう上に立脚して理論を展開しています。と言っても、『傷寒論』と『難経』の論の展開アングルは異なったものになっています。

『傷寒論』も「狭義の傷寒」について論じている訳ではありません。しかし、「温病」や「熱病」や「疫病」については、ただ触れているだけと言う趣です。『金匱要略』では「雑病」を論じていますが、やはり、「温や熱などの病」には論及しているとは言えないようです。

論の大部分は「狭義の傷寒」に費やされております。こう言う点がありますから、当然のことながら、補足される事になって行かざるをえなかった、と歴史的な目で見ることが大切だし適切でしょう。ですから『温病論』（または『温病学』）は生ずべくして生じたのです。

『傷寒論』は『素問』熱論第 31 の「三陰三陽論」の土台のう上に立ち、さらに進んでその論を敷衍しまして、より詳しく三陰三陽の病証とその変化、そして病位を論じ、さらに進んで治療とその治療薬方について記述しております。「厥陰病」については、記述量が極めて少なく、しかも治療薬方の記述が行なわれていない点は良く知られております。

この三陰三陽を、「日本古方派」は、陰陽の消息の角度から「傷寒」を論じているものであると言う面から扱っています。これは、日本古方派が「経絡」と「陰陽五行論」、を拒否していることと関連が深いと思われれます。

中国では「三陰三陽による八綱辨証」は「仲景」が始めたものであると言う点を強調します。「八綱」とは、「陰・陽・虚・実・表・裏・寒・熱」と言う八項目の要素・アングルのことである点は周知のとおりです。

鍼灸治療、鍼灸医学と言う面から見れば、「三陰三陽」＝「六経」＝「六合」の問題を、経絡論的に転回させられるものであるのか？と言う問題であり、また、経絡論として転回するのが適切でなければ、その三陰三陽論と経絡の治療的作用や機能との関係を明らかにしなければなるまいと言うことでありましょう。また、「陰・陽・表・裏・寒・熱・虚・実」の八綱を、鍼灸の臓腑経絡論的に、また、施術手技選択問題としての面においても、更には、穴性論・配穴論の面からも、臨床実践の問題として、具体的に解決しなければならない訳でありましょう。

「三陰三陽」が経脈と如何に関連しているかの問題のヒントは、すでに『黄帝内经』の『素問』熱論第 31 の記述の中に見られます。つまり、「太陽＝太陽経」・「陽明＝陽明経」・「少陽＝少陽経」・「太陰＝太陰経」・「少陰＝少陰経」・「厥陰＝厥陰経」と解釈出来る訳です。

『傷寒論』のこの面の解釈を早くから論じているのは『傷寒類証活人書』（朱肱）でありましょう。そして、これによれば『傷寒論』における「六経」は、足の経脈を主なものと見ております。事実、臨床的に言えば、「狭義の傷寒」の場合には、「朱肱」の論に従う場合の方が多くなっています。しかし、『温病』の治療の場合には、手の経脈が重要な意味を帯びる場合が少なくありません。

「傷寒は六経に従い、雑病・温病は五臓に従う。」

「傷寒論は脈に従い、温病と雑病は証に従う。」

「傷寒の治療に際しては、津液を保つ＝保津を重んじ、温病の治療では清熱・補陰を重んじる」

「傷寒は三陰三陽、温病は三焦。」

「温病の衛・気・榮・血辨証は六経辨証の基礎から発展し、補足して成立したものの。」

「外感熱病の辨証には六経辨証によるのでは、理論的な不足があるので、それを補充して

衛・気・榮・血辨証の論ができた。」

などのように言われているのは、重要な指摘であろうと思います。

◎『温病論』成立の理論史的問題と、その内容

『衛・気・榮・血辨証』（天津中医学院主編・魏玉王奇筆）の中に「温病学説は長期の歴史的な発展の過程を経て形成されたものである。」「それは長期的な臨床経験の蓄積の結果である。」「温病学説が体系的に完成したのは、清代の衛気榮血辨証の理論と三焦辨証の理論の確立によって、理論的な核心が仕上がった為であった。」「簡単に言えば、温病学は内経に淵源し、傷寒論によって孕育され、金元の頃に発展して、明清に形成されたものである。」〈訳・八木〉と記述されているが、極めて要領の良い紹介であると思います。

始めに、温病理論の臨床運用上の要点を紹介して置きます。

章虚谷は「およそ温病の罹患の初期では、熱が發つて微かに悪寒がある。これは邪が衛分に在るものであり、悪寒は無くても悪熱し、小便の色が黄色くなっている。こういうのは邪が已に氣分に入っているものであり、若し脈が數脈となり舌色が絳になっているのは、邪が榮分に在るからであり、また、若し、舌色が深絳になり、煩悶煩燥して寐れない、そして、時には譫語すると言うのは、邪か已に血分に入っているのだ」〈訳・八木〉と述べております。

また、『衛・気・榮・血辨証』（天津中医学院主編・魏玉王奇筆）では、衛・気・榮・血の証について記述していますので、それを翻訳して紹介しましょう。そこでは、次のように概括しております。

- ◇衛分証……………熱があり微かに悪風寒力があり口が僅かに乾き、舌苔は薄い白い舌の縁と先 {辺尖} は赤く、脈は浮数である。
- ◇氣分温熱証…熱は壯熱で、悪寒せず口渴し、舌苔は黄色である。
- ◇氣分温熱証…熱はあるが壯熱ではなく、むしろ熱が籠っている感じで、胸腕には痞満を覚え、舌苔は膩で脈状は濡脈である。
- ◇榮分証……………身熱は夜間に上り、煩躁し（熱の為に心臓が不安になる）譫語することもあり、舌は紅絳となっている。
- ◇血分証……………熱の為に煩躁し斑疹がでたり出血症状がある。

これらが「辨証の要点である」と各項目の後わざわざ述べているのです。

※理論的経過についての若干の紹介

『内経』は省略

熱論第 31・陰陽応象大論第 5・生氣通天論第 3・金匱真言論第 4 など。

『難経』も省略

五十八難ほか…。

『傷寒論』

「太陽病・発熱而渴・不惡寒者・為温病」

『金匱要略』

「太陽中熱者・暍是也。汗出惡寒・身熱而渴・白虎加人参湯主之」

『諸病源候論』（巢元方）～温病 24 候・熱病 28 候・時氣病 43 候・疫癘氣 3 候に見ている。
これらは皆温熱病の範疇のものと言えましょう。

『千金要方』および『千金翼方』

『傷寒論』以後の重要書と言われ、唐以前の失われた多くの薬方を『外台秘要』と共に保存したとされています。「傷寒」概念を広義に用いていますが、温疫・温病・時行病・天行病・湿病・温瘧・陰陽毒など後に温病学理論の対象とされている病候名を挙げて検討しています。

また「温熱病」の早期治療の重要性を指摘している点からも、清熱剤・清熱解毒剤・滋陰解表の法と剤・滋陰清熱法・滋陰攻下法など、方法と薬剤の区分と処方など・また、各種の剤形を考案して後代の製薬技法にも大きな影響を残す等々と、極めて重要な貢献をしています。清熱犀角地黄湯・紫雲丹などは、今に至るも尚、名方として用いられています。後世「三宝」と言われて、清熱・解毒・鎮痙などに運用され、熱病による重篤な症状の治療に重宝されていると言うのです。

『外台秘要』

唐以前の失われた多くの薬方を『千金』とともに保存し、「黒膏方」は温毒によって斑疹が出る場合の外用治療薬として著名です。

『傷寒類証活人書』（朱肱）

張仲景の論の研究と麻黄湯や桂枝湯を「外感熱病」にも運用する道を開いたと評価されています。証により・人により・時により・気候風土により、治法を随証加減することを論じて、当時の医療界の、張仲景（傷寒論の著者）を絶対化するという保守性傾向に、変革的な意味を持ったものでした。

『傷寒総病論』（龐安常）

温疫病を六経に把握して治療する論を言い、また温毒や風温病などの病機と伝変について論じました。「温毒為病最重也・在太陽病不解・転入少陽」「風熱相搏・則発風温…治療在

少陽厥陰」のように述べて、温病学説の為に一定の啓示をもたらしているものです。『黄帝素問宣明論方』『素問玄機原病式』『素問病機氣宜保命集』『傷寒直格』などを著わした劉河間～「六氣皆從火化」と言い主火論者とされています。熱病の治療に優れていたと高く評価されています。また、「三焦分治」も提唱しています。こうして温病学説形成の先駆をなしているのです。

[朱震亨] と [張從正]

外来の火邪は張從正の説、内在的な火熱が変化して病証をなしているものには朱震亨の説と言われたのです。

『医経廻洄集』（王履）

温病と傷寒が明確に異なったものであると論じました。

※温病学形成の過程と重要な貢献を行なった医者

『温病正宗』（王徳宣）は「温病学」を全体的に紹介し、その学説の形成と発展に関わった人々の論の枢要点を引用している。そこに記載されている人々は次の通り。葉天士・呉鞠通・惲鉄樵・王安道・張鳳逵・呉又可・陸九芝・戴麟郊・王孟英・李識候・凌嘉六・柳宝詒・陳葆善・沈漢卿・王馥原・楊如侯・張山雷・雷少逸・章巨膺・薛生白・その他、明代以降の極めて多くの医学者の名が記述されている。

☆主要な温病学の著作とその内容について

代表的な書籍と言われているものは、次の通り…

『温病名著精華』（科学技術文献出版社重慶分社）には、13種類の著作が紹介されている。

『温疫論』（呉有性、又可）

『傷暑全書』（張鳳逵）

『広温疫論』（戴天章、麟郊、北山、）

『傷寒温疫條辨』（楊璇、玉衡、栗山）

『疫疹一得』（紀文達、曉嵐、〈閱微草堂筆記〉一桐城医、余霖、師愚、）

『外感温熱篇』（葉桂、桂、天士、香岩）

『外感温病篇』（陳祖恭、平伯）

『湿熱病篇』 [= 湿熱條辨]（薛雪、生白、一瓢、牧牛老朽）

『温病条辨』（呉瑭、鞠通）

『温熱経緯』（王士雄、孟英）

『随息居重訂霍乱論』（王士雄、孟英）

『時病論』（雷豊、少逸）

『温熱逢源』（柳宝詒、冠群）

これらの重要な問題は《古典について(III)》で紹介します。